診療科目 ● 総合診療医学

プログラム責任者：山本 裕司

主任教授	山本 裕司
教員	日下部 明彦（准教授）
学外スタッフ	後藤 英司（横浜保土ヶ谷中央病院院長）、土肥 直樹（相模原市国民健康保険内郷診療所院長）、小林 英雄（小林内科クリニック院長）、加藤 佳央（県立足柄上病院）、吉江 浩一郎（県立足柄上病院）、太田 光泰（県立足柄上病院）、小澤 幸広（三浦市立病院院長）、鈴木 紳一郎（藤沢湘南台病院）

本プログラムの特徴

当プログラムは、地域における中核病院において地域医療の指導的役割を果たしうる病院総合診療医の育成を目的としています。本プログラムの最大の特徴は学外（地域の関連病院）での研修を２年間行い、さらに横浜市立大学附属病院での希望選択研修を含む１年間の研修を行う３年間のプログラムが基本です。学外研修（関連病院研修）では、大学病院での専門領域研修では経験することのないcommon diseaseをはじめとする幅広い健康問題を経験し、臓器横断的視野から診断、治療、ケアを実践・研修します。また、小児医療３ヶ月、救急医療３ヶ月の研修を行います。少子高齢化が進む中、多くの併存疾患を抱える高齢者に対し、家族・社会背景を考慮した全人的な診療を行うとともに、行政、家庭医、訪問看護、介護施設などと連携をとりながら、今後国が推進する地域包括ケアシステムの中心的な役割を担う急性期病院の一員として最大限能力を発揮できるよう学びます。

また、地域医療のもう一つの担い手である家庭医の役割を理解するため、診療所研修、訪問診療研修を行います。

院内においては、病棟業務の一環として医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士、ソーシャルワーカーを交えたカンファレンスに参加し、チーム医療の重要性と方法論を学びます。

研修期間中には、指導医による定期的な診断推診のレクチャーの他、医療安全、医師法に関する勉強会などを開催します。

横浜市立大学での専門領域研修では希望する選択領域を中心に３ヶ月単位で研修します。

目標とする学会認定専門資格

日本プライマリ・ケア連合学会認定医・指導医

主な協力病院

神奈川県立足柄上病院、横浜保土ヶ谷中央病院、三浦市立病院、藤沢湘南台病院、松田町寄国保診療所

診療科のホームページ URL	担当者・連絡先
http://www.ycu-soushin.jp/	山本 裕司　arevator@yokohama-cu.ac.jp 日下部 明彦　akihiko@yokohama-cu.ac.jp 吉江 浩一郎　kyoshie0907@gmail.com 太田 光泰　mitsuyasuohta@gmail.com

診療科の実績

日本プライマリケアー連合学会の総合診療指導医のいる関連病院において臓器横断的視野から診断、治療、ケアを実践し、地域医療の中心的役割を果たしている。また、関連病院においては横浜市立大学医学部学生に対して学外研修先として学生の教育に当たっている。

指導医から一言

当プログラムは、2017年からはじまる新専門医制度で新設される「総合診療専門医」養成を目的としたプログラムです。「総合診療専門医」創設にあたり、総合診療専門医は、従来の領域別専門医が「深さ」が特徴であるのに対し、「扱う問題の広さと多様性」が特徴であると定義されました。さらに、総合診療専門医は日常的に頻度の高い疾病や傷害に対応できることに加えて、地域によって異なる医療ニーズに的確に対応できる「地域を診る医師」の視点が重要で、地域のニーズを基盤として、多職種と連携、包括的且つ多様な医療サービス（在宅医療、緩和ケア、高齢者ケアなど）を柔軟に提供し、地域における予防医療・健康増進活動などを通して地域全体の健康向上に貢献できることが必要であると明示されました。こうした背景を鑑み、当後期研修プログラムは、地域医療の最前線である学外研修を主体とするところが最大の特徴です。「広く、多様な問題」を扱うためには、単にジェネラルマインドを有するのみでは太刀打ちできず、サブスペシャリティの片手間に気持ちだけこめてやればよいという程、簡単なものではないのです。サブスペシャリティの切り口とは全く異なる生物的、心理的、社会的側面からの包括的な切り口で問題解決にあたる能力が求められるため、高度な臨床診断推論能力、状況に応じた適切なマネージメント能力、基本的な全身管理能力の涵養が必要です。以上を踏まえ、一般内科研修と横断的診断学を加えた総合診療科研修を行います。当総合診療科後期研修プログラムは、なんでもかんでも「共感」ですます「いいヒト」を作るプログラムではありません。「医師」として当然行うべき「見立て」とそれに基づいた「解決策の提示」が適切にできるようになることが最終目標です。そのために多職種連携、病診連携、病病連携も学んでいきます。

当プログラムのこだわりとして、横断的診断学研鑽のための症候学レクチャー、病歴に基づく臨床推論法、診断のためのfocussed physical examinationレクチャー、global standardなcommon disease review、major雑誌の抄読会、臨床推論力育成のための症例検討会を定期的に実施します。こうして得た知識、技術を日々の臨床に生かすべく、繰り返し朝の全体カンファレンス、チームカンファレンスで確認していきます。こうしたたゆまぬ努力により病める人の健康問題を解決する方法を身につけていきます。基本に忠実に学びを続けていけば、やがてはcommon diseaeのみならず、各専門領域の間で埋もれてしまった難病の診断をも可能となり、診断困難症例に対する臨床診断医としても多くの人々に福音をもたらすことができるのです。

社会人として、そしてプロフェッショナルである医師として、患者、患者家族に誠意をもって対応ができるよう、模擬患者を用いての病状説明研修を実施しているのも当プログラムの特徴です。

また、日常で生じる疑問を定式化し、臨床研究をデザインする方法論も学んでいきます。研究を指向する能力。これも将来の総合診療指導医には必要な能力です。

私たちの科に「これはうちじゃない。」という言葉は通用しません。たとえ、それが、専門性の高い領域に関わる健康問題であるにせよ、まず、患者の訴える言葉に耳に傾け、最も適切な道筋を示すことができること。これが、総合診療医の専門性と考えます。是非、われわれとともに、この厳しい少子高齢化社会に真に必要とされる医療人を目指しましょう。私たち指導医はそのための努力を惜しみません。